

学内広報

for communication across the UT

宝の山
東大
絵図



特集：ご存知ですか？
本郷キャンパスのレア知識

特集

ご存知ですか？ 本郷キャンパスのレア知識

130年以上の歴史を誇る本郷キャンパスには、教職員にもあまり知られていない様々なモノ(あるいはコト)がたくさんあります。そこで今回の特集では、知る人ぞ知る本郷キャンパスのレア知識をご紹介します。あなたはいくつ、ご存知でしょうか？

① 台貫所

「だいかんじょ」と読みます。いわば、巨大なハカリです。写真の小屋の中に15000kg(15t)まで計れる重量計があって、小屋の前に大きな鉄板(体重計でいえば、人が乗る部分)があります。施設・資産系保全グループの柳潔副課長のお話では、現在、構内の解体工事で出た鉄筋や配管などの重さをこの台貫所で計り、調達・経理系を通して売り払っているのだそうです。つまり、鉄くずをトラックに積み込み、トラックごと、大きな鉄板の上に乗って重量を計るわけですね。一見、その「巨大さ」に驚きますが、もっと驚くのは「古さ」。柳さんに昔の構内図面を広げていただいたところ、1937(昭和12)年以降の図面には台貫所らしきものが描かれています。おそらく1936(昭和11)年に設置されたものだろうと考えられるわけです。東大にはこういう超レアなものが残っているんですね。皆さんも一度、見に行かれることをおすすめします。



② 三四郎池脇のポンプ

このポンプ、以前に学内広報に連載していた『龍岡門横丁噺～広報センターより～』という記事でも紹介しました。三四郎池の安田講堂側、浜尾新先生像の近くにある古くて大きなポンプ。実は『帝國大學新聞<1928(昭和3)年10月15日付第267号>』に【池の端の樹蔭にしゃれたポンプ】と題された記事があり、それによると、三四郎池の水を吸い上げる撒水用ポンプだったとのこと。近づくとも、かなり大きいです。



③ 砲弾型消火栓

法文2号館の脇にひっそりたたずむ古～い消火栓。黄色に塗られ、砲弾の形をしています。雑誌『東京人』誌上で、デザイナーの林文二さん(路上観察学会員)が【『砲弾型』と命名されているぐらいであるから、やはり軍国主義の時代の産物であり……(中略)……東大の構内には少なくとも四本は健在である。】と書いておられます。これ以外の砲弾型消火栓探しをするのも、また楽しいのでは？ 発見された方は、ぜひ、本部広報グループまでメールにて、ご一報を。
<参考文献>『東京人』1996(平成8)年5月号・「路上探偵、本郷キャンパスをゆく。」・林文二・都市出版(株)



④ 交番前の銀杏

本郷通りと言問通りが交わる本郷弥生交差点。その角の交番の前に銀杏の木が立っています。実は、この銀杏の木、以前は東大構内にあったものだそうです。慈愛病院(言問通り沿い)のコミュニティペーパーに棚沢書店(本郷通り沿い)の棚沢孝一さんが次のように書いておられます。【昭和三十九年(一九六四)……(中略)……弥生一丁目の言問通りは現在の道路幅になりました。この時、農学部正門横にあった交番が交差点角に移りました。「実のなる銀杏」が歩道上の交番脇に残っているのはここが農学部構内だった名残です。さらによく見るとこの銀杏と工学部構内の道路沿の銀杏とは本郷通りと平行の同一線上に植えられていたことがわかります。】普段、何気なく通っている歩道の銀杏の木にも、こんなエピソードがあったのです。

<参考文献>財団法人慈愛病院『慈愛だより』・わが町探訪第四回『本郷弥生交差点』・棚沢孝一



⑤ 「運動会」は御殿下グラウンドから始まった？

春あるいは秋になると、当たり前のように日本全国で盛んに行なわれている運動会。実は、この運動会発祥の地は御殿下グラウンドなのです。ご存知でしたか？ もっとも、正確に言うと、御殿下グラウンドの「運動会」そのものの発祥の地ではなく、「運動会という名称」の発祥の地であるようです。日本で最初に行なわれた運動会は1874（明治7）年に海軍兵学寮で行われた「競闘遊戯会」。ただし、この時にはまだ「運動会」という名称が存在していませんでした。その後、1878（明治11）年に札幌農学校で運動会が行なわれましたが、「力芸」という名称で呼ばれていました。そして1883（明治16）年、東京大学で運動会が行なわれ、初めて「運動会」という名称が使われたのです。1888（明治21）年には、後の大正天皇の臨席のもと「秋期運動会」が行なわれ、これをきっかけに運動会は全国に普及していったとのこと。運動会のみならず、このような「東大をきっかけに……」といった話は様々な分野でよく聞かれます。当時の東大は輸入文化を一般に広める発信基地の機能を担っていたんですね。

<参考文献>

◆『運動会と日本近代』吉見俊哉+平田宗史+入江克己+白幡洋三郎+木村 吉次+紙透 雅子共著・青弓社・1999年

◆『東京大学 本郷キャンパス案内』

木下直之+岸田省吾+大場秀章・東大出版会・2005年



⑥ 緑色の巨大パイプ

第二本部棟の前に立っている緑色の巨大なパイプ。かつて地下駐車場の吸気塔だったもので現在も本部棟・第二本部棟の一部の吸気に使っています。このパイプ、なぜ、鮮やかな緑色なのか？ 本部総務・法務系の関谷孝副統括長（蓮實重彦 元総長の秘書を務めた）によれば、以下のようなエピソードがあるそうです。10年ほど前、このパイプは黒い色に塗られており、なおかつ古びて錆び付いていたとのこと。そこで当時の蓮實重彦総長は「もっと美しく塗り直してください」と施設部（当時）に指示されました。施設部が「何色に塗るべきでしょうか？」と蓮實総長におうかがいを立てたところ、蓮實総長は迷われ、



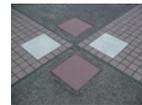
安藤忠雄教授（現・特別名誉教授）に相談。安藤先生が「緑が良いでしょう」と決めてくださったそうです。ご存知の通り、本部棟と第二本部棟は建築家・丹下健三先生の作品。当然、このパイプも丹下作品。その塗り替えを蓮實先生が発案し、安藤先生が色を決めたといういわくつきのパイプなのでした。ちなみに、蓮實先生は「東大構内における初の安藤作品は福武ホールだと思いがちですが、実はあのパイプの色が初の安藤作品です」とおっしゃっているとのこと。なるほど。なんとなく得した気分になるレア知識です。

⑦ 四神の色タイル

文学部3号館を囲むように、青、赤、白、黒の色タイルがあります。薬学系研究科事務部の臺久専門員によれば、これは陰陽五行説の青龍（東）、朱雀（南）、白虎（西）、玄武（北）の四神にちなんで決められた色タイルなのだとのこと。文学部3号館の建物が完成した1987（昭和62）年当時の文学部長は戸川芳郎教授（現・名誉教授）。中国哲学の研究者である戸川先生の発案でこのタイルの色が決まったことを、臺さん（当時、文学部事務）は先生ご自身からうかがった経験がおりだとか。教えてもらって初めて分かるレア知識ですね。



東



南



西



北



【番外編】万歳三唱は東大から始まった！

古い学内広報のページを繰っていたら、とてもおもしろい記事を発見しました。学内広報362号（創立百年記念特集号）に当時の小林靖之広報企画課長が「萬歳の由来」という記事を寄稿なさっています。小林課長は記事で以下のように記しています。

【明治22年2月11日の憲法発布の式典に際し、大学として奉祝の意を表するため、総長以下教職員、学生が「宮城正門外」で「臨幸の車駕」をお迎えすることとなった。この時単に最敬礼を行うばかりでなく、もっとよい奉祝の方法はないかと種々研究した結果、古例により「萬歳」と唱えることに決めたが、発音は「バンザイ」ということとし、しかも「萬歳・萬歳・萬々歳」と三唱することになった。】

つまり、万歳三唱は東大が発祥の地なのです！ 驚きですね。小林課長(前出)はこのトピック

を東京帝國大學五十年史で見つけたとのこと。ちなみに万歳三唱の発明者は和田垣謙三法科大学教授（当時）だそうですが、当初、「奉賀」を三唱しようとして学生に練習させてみたところ、「阿呆」と間違えられそうだったので「萬歳」を三唱することにしたそうです。たしかに、「ほうが一ほうが一ほうが一」と三回叫ぶと、「阿呆が一」に聞こえますよね。明治時代は、江戸時代にはなかった新しい日本語がたくさん作られた時代ですが、このように東大から誕生した言葉も少なくなかったのかもしれない。古き良き東大をイメージさせてくれるレア知識です。

<参考文献>

◆学内広報362号（1977年4月12日発行）

◆東京帝國大學五十年史

⑧ 図書館建物の残骸

総合研究博物館に入ろうとすると、両脇に、やや無造作な風情で置かれた石（？）。実は関東大震災で被害を受けた図書館建物の残骸と工科大学建物の残骸なのです。特にへの字の形をした図書館建物の残骸は工事のための発掘調査で出土したものの。震災後、放置され、土に埋まっていたというわけです。



制作：本部広報グループ

NEWS

一般ニュース

本部人事給与グループ

今年度の定年退職教員は 61 名

一般

平成 21 年 3 月 31 日をもって本学を定年退職される予定の教員（講師以上）は教授 53 名、准教授 5 名、講師 3 名の計 61 名です。

（平成 21 年 1 月 27 日現在）

部局	職名	氏名（漢字）
大・法	教授	大沼保昭
大・法	教授	野崎薫子
大・医	教授	廣川信隆
大・医	教授	野本明男
大・医	教授	小俣政男
大・医	教授	玉置邦彦
大・工	教授	鈴木博之
大・工	教授	岡部篤行
大・工	教授	毛利尚武
大・工	教授	木村文彦
大・工	教授	松島克守
大・工	講師	綿貫忠晴
大・文	教授	鈴木泰
大・文	教授	佐藤慎一
大・文	教授	塩川徹也
大・文	准教授	寺島孝一
大・理	教授	佐藤勝彦

大・理	教授	松浦充宏
大・理	教授	岩澤康裕
大・理	教授	中田好一
大・理	准教授	吉村宏和
大・理	准教授	菊池淑子
大・農	教授	田付貞洋
大・農	教授	米山忠克
大・農	教授	祥雲弘文
大・農	教授	田中忠次
大・農	教授	西澤直子
大・農	教授	相良泰行
大・農	教授	日野明德
大・農	講師	高野泰
大・済	教授	神野直彦
大・養	教授	臼井隆一郎
大・養	教授	岡秀夫
大・養	教授	杉橋陽一
大・養	教授	大貫隆
大・養	教授	山本巍
大・養	教授	廣松毅
大・養	教授	里見大作
大・養	教授	友田修司
大・養	教授	大築立志
大・養	教授	繁榊算男
大・養	教授	鹿児島誠一
大・養	教授	鈴木賢次郎
大・薬	教授	海老塚豊
数理	教授	菊地文雄
創域	教授	和田仁
創域	教授	松井孝典
創域	教授	大澤雅彦
情理	教授	舘暲
学環	教授	原島博
地震	教授	島崎邦彦
地震	准教授	佃為成
社研	教授	廣渡清吾
生研	教授	渡邊勝彦
生研	教授	藤田隆史
生研	教授	七尾進
分生	講師	大坪久子
物性	教授	石本英彦
物性	准教授	黒田寛人
先端	教授	町田和雄
先端	教授	伊福部達

環境安全本部

「東京大学教職員・学生のための救命講習」開催される



一般

12月11日(木)9時から12時まで、本郷消防署の指導のもと、本年度2回目の「東京大学教職員・学生のための救命講習」が、本郷消防署3階セミナー室で実施された。

今回の救命講習では、東大ポータルサイトに掲載した段階から多くの参加希望が寄せられ、募集定員30名のところ、36名が参加することとなった。参加者内訳は教員6名、研究員1名、学生3名、職員等26名で、部局別では農学生命科学研究科からの参加者が7名と最も多かった。参加者は3時間の講習時間を通して、心肺蘇生法、自動体外式除細動器(AED)※の使用方法、止血法、気道異物除去法などを学んだ。参加者には東京消防庁消防総監の認定する「救命技能認定証」が交付される。次回講習は平成21年6月頃開催の予定である。

※ 自動体外式除細動器(AED)

Automated External Defibrillatorのこと。突然、心停止状態になった傷病者の心臓に電気ショックを与えて正常な脈拍を取り戻させるための医療機器である。2007年7月より医療従事者以外の方でも使用できるようになった。ただし、何回も使用することが予想されるような場合は上級救命講習を受講し、認定が必要である。

環境安全本部では、本年度、学内にAED10台を新規設置、13台を希望のあった部局に譲渡した。

※ 参考情報

■ 学内広報 2007年5月分 NO.1358 (2007. 5.30)

「環境安全本部、学内にAEDを配置!

— [保存版] 救急救命マニュアル —

<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1358/index.html>

■ 環境安全本部 HP

TOP → 資料 → AED 設置場所

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/office/anzeneisei/data/aed.html>



真剣に講義を聞く参加者



講義後は、心肺蘇生法に挑戦!
講師1名が9名を指導

地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)

アフリカ水循環シンポジウム開催



一般

1月6日(火)から8日(木)まで、アフリカ水循環シンポジウムがチュニジアの首都・チュニスにて開催された。

複数のシステムからなる全球地球観測システム(GEOSS)が定義している、9つの社会福祉に貢献する分野のひとつとして「水資源管理」が挙げられているが、さまざまな水問題に関する取り組みの中でも、そのプロトタイプとして推奨されているのが、本学 EDITORIA 機構長である小池俊雄教授(工学系研究科)がリードするアジア水循環イニシアティブ(AWCI: Asian Water Cycle Initiative)である。このたびのアフリカ会議は、アジアでの成功例をアフリカへ展開させようとする試みである。

昨年7月にわが国で行われた北海道洞爺湖G8サミットの中で、「とりわけ気候変動及び水資源管理に関し、観測、予測及びデータ共有を強化することにより、GEOSSの枠内の努力を加速化する」ことが首脳宣言に

盛り込まれた。わが国でも、これを受けて国家基幹技術「データ統合・解析システム」の研究開発の加速に努め、EDITORIA が支援する国際会議としては初めてのアフリカ大陸進出となった。今回のシンポジウムは、平成 20 年度日本学術振興会 (JSPS) 二国間交流事業の枠組みによる共同研究 / セミナーとして実施され、運営実行を、チュニジア側科学技術エコパーク (Borj Cedria Ecopark)、チュニジア工科大学 (ENIT)、および本学 (EDITORIA) の三者が連携して担った。異なる文化の壁を乗り越えて、ひとつのシンポジウムの開催にこぎつけるまでに、度重なる電話会議による国際調整が行われた。チュニジアのラズハール・ブウニ高等教育・学術研究・テクノロジー大臣の来日の折には、山内俊夫文部科学副大臣、平尾公彦理事・副学長、小池機構長を大使館に招いての晩さん会も開催された。



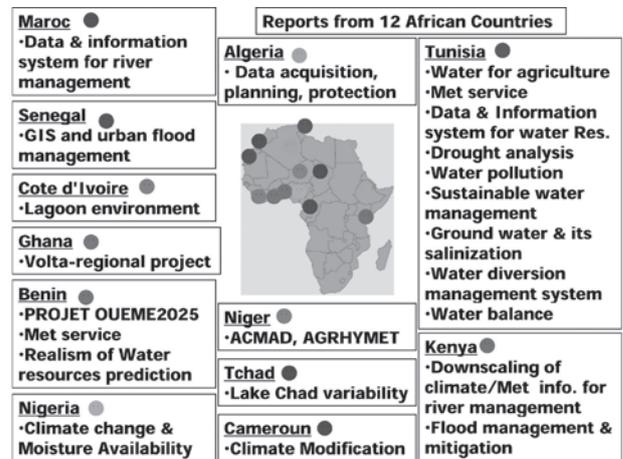
アフリカ水循環シンポジウム参加メンバー

チュニジアを含むアフリカの 13 ヶ国 (アルジェリア、ベナン、コートジボアール、カメルーン、エチオピア、ガーナ、ケニア、モロッコ、ニジェール、ナイジェリア、セネガル、チャド、チュニジア) から、水問題の専門家、気象水文関係機関の代表者が本会合に出席し、水循環および気象観測に関する国連機関からは、世界気象機構 (WMO)、ユネスコ (UNESCO)、国連アフリカ経済問題委員会 (UNECA)、国連大学 (UNU)、および国際衛星観測機関であるヨーロッパ宇宙開発局 (ESA)、日本宇宙航空研究開発機構 (JAXA)、全球地球観測に関する政府間会合 (GEO) 代表などからも多数の出席を得た。全体ではアフリカとヨーロッパおよびアジアの 17 カ国から延べ 109 名の参加があった。

アフリカ各国の共通言語がフランス語であることから、三日間に及ぶ全セッションに渡り、英仏同時通訳つきで会議が行われた。会場では、アフリカでの水問題の緊急性を認識し、これを定義することによって、GEOSS への貢献の可能性を探ることを目的として、非常に熱心な議論が進められた。

本学からは、EDITORIA の柴崎亮介教授 (空間情報研究センター長) が「GEOSS のデータ相互運用性」と題して、主に観測データをアーカイブする際のメタデータに関する講演を、木本昌秀教授 (気候システム研究センター・副センター長) が「最先端の気候モデルを駆使

した気候変動予測」のキーノートレクチャーを行った。大変好評で、活発な質疑応答が行われた。シンポジウムの最後には、小池機構長によってアフリカ 12 カ国からのレポートが下記の図としてまとめられ、全体の議論を通して、アジアに続き、アフリカ水循環イニシアティブを構築するプロセスを含む会議サマリーが合意された。



アフリカ 12 カ国からのレポートのまとめ

その他、本会議に関する概要などについては、以下の会議 HP からご覧いただけます。

<http://www.geoss-awcs.com/>

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)

「データ統合・解析システム (DIAS)」

平成 20 年度最終報告会開催

一般

1 月 15 日 (木) 弥生講堂において、「データ統合・解析システム (DIAS)」の平成 20 年度最終報告会が、地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA) 主催で開催された。

「データ統合・解析システム (DIAS)」は、地球規模観測や各地域における観測で得られるデータ、また、数値気象・気候予測モデル等の出力データを収集、永続的に蓄積・統合・解析し、さらには社会経済情報などとの融合を行い、世界の環境問題や自然災害などの脅威に対する危機管理に有益な情報へと変換して、国内外に提供することにより、わが国の総合的な安全保障や国民の安全・安心の実現に資することを目的としている。また、当該科学技術分野におけるわが国の国際的主導性を発揮して、包括的で調整された持続的な地球システムの観測を達成することを目的とする「複数のシステムからなる全球地球観測システム (GEOSS)」の構築を先導するものである。



田中大臣官房審議官による開会挨拶

会議の冒頭では、文部科学省の田中正朗大臣官房審議官（研究開発局担当）から、「気候変動・地球温暖化に対して影響評価を行い、適切な適応策を立案する上で効率的・効果的に流用することが大切であり、これらの地球観測データを統合・解析し、情報提供を可能とする『データ統合・解析システム』の重要性は、GEOを加速する必要性がG8北海道洞爺湖サミットの首脳宣言文に盛り込まれたように、今後ますます高まるだろう」、「平成20年6月に実施された中間評価では順調に進捗しているという評価がなされた」との開会のご挨拶をいただいた。

その後、「システム開発」・「データ投入」に関する4研究課題、および「地球観測データの科学的・社会的に有用な情報への変換」に関する水・気候・農業・生態系などの9つの利用研究課題における平成20年度の研究報告・評価が行われた。「総合討論」では小池機構長より、DIASが目指すものとして「分野を超えて共有できる知」、「世界で共有できる知」、「体感できるデータと情報」、「公共的利益分野への貢献」が挙げられた。次年度からは「アフリカへの貢献」も提案され、活発な議論が行われた。

討論の後、JAXA堀川康理事から、「今後とも様々な衛星を打ち上げ、多様なニーズに合ったデータ提供協力につとめ、社会貢献していきたい」との決意をいただいた。

会議の閉会時には、平尾理事・副学長から、「総長もEDITORIAの発展を期待しており、人事面においてその活動を強化し、プロジェクトを支援したい」、「各学問領域を超えた連携によって新しい知の創造ができるだろう」との開会のご挨拶をいただいた。



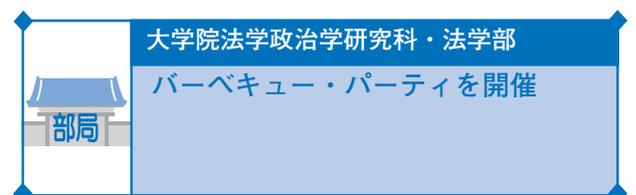
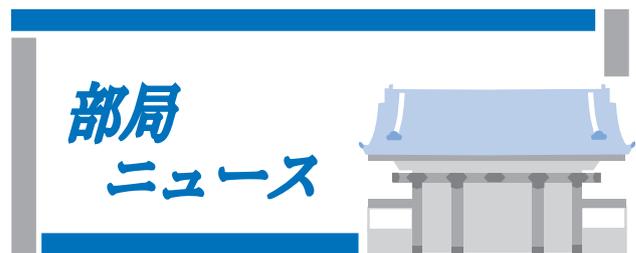
平尾理事・副学長による閉会挨拶

なお、本最終報告会の状況は、地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）、ならびに、データ統合・解析システム（DIAS）のHPに掲載されている。

地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）

<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

<http://www.diasjp.org/>



11月3日（月・祝）、大学院法学政治学研究科・法学部では、留学生や外国人客員研究員と教職員が親睦を深めるために、都立潮風公園（お台場）でバーベキュー・パーティを開催した。10月入学者を中心に留学生が36名、外国人客員研究員が3名、そして教職員や参加者の家族を合わせて計75名が参加した。

開始30分前に学生有志と教職員が協力して、コンロと椅子・テーブルの設営、調理器具と食材の配付を行った。ちょうど準備が整った頃、全員が集合。12時から10グループに分かれて、バーベキューを開始した。日中、ずっと曇ってはいたが、風がなかったので寒さは厳しくなく、まずまずのバーベキュー日和となった。

肉、魚、野菜、焼きそば、各グループが思い思いの順序で調理し、テーブルを囲んで食文化の違いや日本での生活などを話題にしながら楽しく談笑した。14時ごろ全員でベイブリッジを背景に記念撮影をして散会となった。

た。

参加者はのびのびとリラックスした様子で、バーベキューを通じて学生同士、そして学生と教職員との親睦が一層深まり、大変有意義な会となった。



集合写真



井上正仁研究科長(右)と一緒に

生産技術研究所



「位置エネルギーを活用した世界初の省エネ型都市交通システムの実験線」を附属千葉実験所に敷設

この度、生産技術研究所は運輸部門の温暖化防止対策の一つとして期待されている省エネ性・低建設コストに優れた省エネ型都市交通システム（通称「エコライド」）の開発に向けた実験線を附属千葉実験所内に敷設した。この実験線の敷設の目的は軌道の高低差を利用した省エネ型走行システムと、脱線防止性能に優れた車両とレールの接続構造を用い、低振動・低騒音に優れた車両及び軌道を開発することにある。本開発プロジェクトは独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の委託を受けて、省エネルギー技術開発を目的とした「位置エネルギー利用のハイブリッド省エネ型エコライドシステムの研究開発」として平成18年度より進められているもので、東京大学、泉陽興業（株）・泉陽機工（株）、（独）交通安全環境研究所、（株）三菱総合研究所、（株）明電舎で開発グループが構成されている。

11月14日（金）には千葉実験所公開に合わせて実験線完成式を行い、多くのご来賓をお招きした。文部科学省学術機関課桑田課長補佐、経済産業省資源エネルギー庁省エネルギー対策課新保課長補佐、国土交通省鉄道局技術企画課米澤課長、NEDO省エネルギー技術開発部

岩井主任研究員、財団法人運輸政策研究機構深谷理事長、泉陽興業山田会長、三菱総研西山主席研究員、明電舎鳥飼専務執行役員、本学から山田理事、前田生産技術研究所長、須田千葉実験所長の方々によるテープカットとくす玉割りで実験線の完成を祝い、モックアップ車体を搭載した車両による走行実験のデモンストレーションを行った。

この実験線完成式の様子は同日のNHKや民放のニュースで報道されたほか、新聞や雑誌などに多数紹介された。



「エコライド」実験線とモックアップ車両



ご来賓によるテープカット



大学院教育学研究科・教育学部

堀尾輝久名誉教授にトゥールーズ第Ⅱ大学（フランス）より名誉博士号が授与される

教育学部長（1988年4月～1990年3月）も務めた堀尾輝久名誉教授（教育哲学、教育学博士）に、昨秋（2008年11月27日）、トゥールーズ第Ⅱ大学日本学科の発展に、長年貢献したこと等の国際的な教育・研究活動が高く評価されて、名誉博士号が授与され、同大学において盛大な式典と記念講演が行われた。

堀尾名誉教授は、法学部の丸山真男ゼミで政治思想史を学んだ後、教育哲学の勝田守一教授に師事し、教育学・教育思想の専門家として旺盛な研究活動を続け、『日本の教育』、『人権としての教育』、『現代社会と教育』、『地球時代の教養と学力』等の著作を世に出し、それらの多くが数ヶ国語（英語、仏語、中国語、韓国語）に翻訳さ

れ、世界の教育研究に多大な貢献をしてきた。

とりわけ、フランスに学びフランス好きで知られる堀尾名誉教授は、ルソー、ピアジェ、ワロンの思想に啓発され、子どもの権利、人間発達の視点を軸にした教育・研究活動を幅広く展開してきた。また、平和憲法の擁護者、民主主義教育の推進者、「たたかう教育思想家」として国内外で高く評価されてきた。

すでに1994（平成6）年、フランス大使館よりパルムアカデミック賞（フランスの教育文化功労章）が授与され、日仏間の深い知的交友の貴重な教育研究者と認められているが、今回の名誉博士号は、その功績にさらに華を添えるものである。

南フランスの北部に位置する古い文化の街トゥールーズで行われた当日の式典には、小宮山宏総長にも招待状が届けられ（公務により欠席されたが、後日祝辞が届けられた）、トゥールーズ第Ⅱ大学学長をはじめ、大学及び市の関係者が、数多く参加する中、荘厳かつ和やかな雰囲気で行われ、堀尾名誉教授は、答礼として、40分間の小講演を行った。翌日の日本研究のシンポジウムでは、日本の神話からジェンダー問題まで報告され、フランスでの日本への関心の広さを窺わせた。ご自身は、「日本の民主主義教育」について報告、あわせて「日本の感性」と称して「刈り干し切り唄」（宮崎県）を得意の美声で披露したのも、エスプリの効いた趣向となった。

大学院教育学研究科・教育学部として、子ども、人間発達を主軸にした視座の大切さを改めて深く認識させられた国際的な慶事であった。堀尾名誉教授の益々のご健勝とご活躍を祈念すると共に、その思想の系譜を継承・発展させていきたい。



フランス・トゥールーズ第Ⅱ大学で行われた式典の様相（功績紹介）



答礼を読み上げる堀尾名誉教授

大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で「新年会」開催される

1月11日（日）、三鷹国際学生宿舎において2009年新年会（New Year's Party）が行われた。この新年会は、毎年、留学生に日本の正月を楽しんでもらいながら、留学生と日本人学生との交流を促進する目的で、院生会（留学生をサポートするための大学院生の組織）及び宿舎学生会（宿舎の全学生を構成員とする組織）の共催により行われているものである。当日は、大学院生、学部学生、留学生を含め延べおよそ40人が参加した。



会場の様子

会場となった宿舎共用棟ホールの中にはこたつが用意され、大型スクリーンでは「男はつらいよ」や「釣りバカ日誌」などの正月映画が上映されるなど、正月気分にあふれる会場となった。また会場では、主催者が用意した雑煮、汁粉、ちらし寿司、おとそなどが振る舞われ、参加者は舌鼓を打った。正月の風物詩として、書き初め、羽子板、こま、剣玉、福笑い、百人一首なども用意され、参加者は思い思いの伝統的遊戯を楽しんでいた。会の冒

頭には、イベントの一環としてもちつきを行い、留学生も杵を振るい、とても好評であった。



もちつきを体験する留学生

つきたてのモチは黄粉もちや雑煮にして参加者に振る舞われた。また羽根つきの勝負の結果、顔を墨だらけにする参加者も登場し、会場の笑いを誘っていた。

今後も、留学生が日本文化に触れながら、同時に日本人学生も留学生から多くを学び文化的な視野を広げたいけるような企画を継続できることを願っている。



書き初めに挑戦

先端科学技術研究センター



先端研に新名所「PAUSE (パウゼ)」誕生

先端科学技術研究センターでは隣接する生産技術研究所とも調整し、今年度の初めから時計台のある13号館など、まだ旧いたたずまいの残る建物周辺の整備を行ってきた。その一環として、13号館南側に新しく誕生したのが憩いのコーナー「PAUSE (パウゼ)」である。

エネルギー・環境分野の研究に力を入れている先端研らしく全てがエコ仕様。まず、雨などで地面がぬかるんでも平気なように敷設したウッドデッキには、木粉と、人と環境に配慮した非塩ビ系プラスチックの複合材料が用いられている。これは天然木の風合いとプラスチックの耐久性・成形性という両方の利点を併せ持ち、環境に

やさしくリサイクル可能な環境共生木質新素材だ。

ベンチには低コストの太陽電池として最近注目されている「色素増感太陽電池」を座面に設置、日中は太陽光を受けて内部の蓄電池に電気が蓄えられるようになっている。その電気が使用されるのは夜間。ベンチの下につけられたLEDが自動点灯して暗くなった足元を照らす、というわけである。

さらに、この「PAUSE」をより憩いのコーナーらしくしているのが雨よけ・日よけになる大きなパラソルの存在だ。一見、フツウのパラソルに見えるが、実はセルフクリーニング機能を持つ光触媒(酸化チタン)を染み込ませた特殊な膜で作られている。光触媒が施されると雨水による自浄作用がはたらき、汚れによる劣化が少ないためにパラソルの白さが保たれ、明るさを維持することが出来る。また、この「PAUSE」は学内で定められている喫煙スペースのひとつにもなっているため、光触媒による空気の洗浄機能も期待されている。

このように、なかなか直に触れる機会のない最先端の技術がさりげなく集結している「PAUSE」にはドイツ語で「ひと休み」というような意味がある。仕事に疲れた皆さんが、「パーッ」とたまった息を気持ちよく吐き出して、リフレッシュする場所になることを願って、つけられた。目の前のカフェでコーヒーを買って、パウゼでパーッとしてみるのはいかがだろうか。

(※ 本件整備にあたり、「アイシン精機株」「太陽工業株」「ナガセエコプラス株」の各社からご協力いただいた)



憩いコーナー PAUSE



色素増感太陽電池を使用したソーラーベンチ

大学院総合文化研究科・教養学部

駒場 I キャンパスで「研究科長と留学生との懇談会」開催される

1月21日(水)18時30分から、教養学部コミュニケーションプラザ南館2階において、「平成20年度総合文化研究科長・教養学部長ならびに数理科学研究科長と外国人留学生との懇談会」が開催された。

この催しは、駒場 I キャンパスで学ぶ留学生と教職員とが一堂に会し、懇談を通じて、交流と相互理解を深めることを目的として毎年開かれているものである。当日は留学生、チューターや教職員あわせて120名近い参加者となった。

会は、刈間文俊国際交流・留学生委員会委員長の開会の辞ではじまり、主催者である小島憲道総合文化研究科長・教養学部長と桂利行数理科学研究科長の挨拶ののち、総合文化研究科の長谷川壽一副研究科長の発声で乾杯、にぎやかな懇談がはじまった。

途中、教養学部文科一類1年のキンジュシェンコ・ヤン・アレクセイエビッチ(ロシア)さん、総合文化研究科修士1年のハウ・シャン・リンさんのスピーチがあった。それぞれ留学生生活を真摯で心温まる言葉で語り、会場からは大きな拍手がおくられた。

今年も恒例の餅つきが行われ、多数の留学生が果敢に挑戦した。杵の振り方にもすぐに慣れて、またたく間に餅がつきあがり、その場でつくたての餅が振舞われた。

サラ・リムさん(オーストラリア)とエドモンド・ステンソンさん(イギリス)によるバイオリンとギターの息の合った共演、ホイットニー・ホワイトさん(米国)による2ヶ月で曲をマスターしたという琴の演奏、シンカさん(中国)による華やかな民族舞踊も披露され、彼らの多才ぶりに会場から拍手喝采がわき起こった。

会は盛況のうちに、総合文化研究科の木村秀雄副研究科長の閉会の辞をもって20時30分すぎに閉会した。



「駒場 I キャンパス・研究科長と留学生との懇談会」集合写真

平成20年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日	配布
1384	2月25日(水)	3月13日(金)	3月19日(木)

平成21年度の発行スケジュールは本誌16ページに告知しています。

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



訂正告知

学内広報1380号「学生生活実態調査の結果」の一部に訂正がありましたことをお詫び申し上げます。訂正後の内容を以下のwebアドレスに掲載しました。

<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1380/index.html>

2008年度 産学連携共同研究シンポジウム 「情報技術の未来と大学／ITベンチャーの役割」



北野宏明氏による基調講演



パネルディスカッションの様子:写真左から、司会:五内川拓史氏
 北野宏明氏、鈴木潤一氏、斎藤武一郎氏、各務茂夫教授

グローバルな視点から我が国のITベンチャーの可能性を探る

東京大学産学連携本部、(株)ユニファイ・リサーチ(代表取締役社長:五内川拓史氏)共催による産学連携共同研究シンポジウム「情報技術の未来と大学／ITベンチャーの役割」が1月22日(木)、弥生講堂で開催されました。

シンポジウムでは、北野宏明氏(株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所取締役所長、東京大学先端科学技術センター客員教授)の「情報技術の未来」をテーマとした基調講演に続いて、鈴木潤一氏(株式会社メタWeb研究所代表取締役社長)と斎藤武一郎氏(SIGHT ENTERTAINMENT JAPAN代表取締役)からは「ITベンチャーの実際」と題してセッション報告がありました。

続くパネルディスカッションでは、主催者である五内川氏と本学産学連携本部事業化推進部長の各務茂夫教授も加わって「情報産業における大学／ITベンチャーの役割」をテーマに様々な視点から論点が提示されました。

とりわけ、ビジネスの「グローバル化」や「標準化」をキーワードに活発な議論が繰り広げられ、研究とビジネスを上手く繋ぐ仕組みとしてベンチャー企業の役割が大きいこと、またベンチャーこそ、海外の標準化コミュニティに対して積極果敢な発言・発信をすべきだ、といった指摘が相次ぎました。

同時に、ベンチャーマインドの醸成やイノベーション創発の環境づくりに向けた本学に対する期待も数多く寄せられ、外国人研究者の増員、起業のための実践的なプロフェッショナルスクール機能の強化や、グローバルなベンチャー企業輩出に向けた基盤づくりの必要性等の指摘がなされました。

産学連携本部では、今年度から学生起業家育成プログラム「東京大学アントレプレナー道場」の一環として本学学生チーム選抜と北京大学ビジネスプランコンテスト参加学生との交流プログラムを開始しました。この学生プログラムが、グローバルに通用するITベンチャー起業に繋がればと願っています。

第4回UCRソフトウェア実用化提案会 渋滞現象の抑制と緩和

第4回UCRソフトウェア実用化提案会「渋滞現象の抑制と緩和」(西成活裕大学院工学系研究科准教授)が1月21日(水)、産学連携プラザで開催されました。同提案会は民間企業等によるソフトウェア活用の促進や共同研究の創出を目指すもので、昨年度から開催しております。

西成准教授は、車や人の渋滞のみならず、自然界におけるアリの行列や、インターネット通信、体内、工場の在庫で発生する渋滞を、数理的な観点から分析し、その解消に向けた研究(渋滞学)を行っています。特に車や人の渋滞解消には、「損をして得をとれ」、「急がば

回れ」といったことわざの有効性が、研究成果からも裏打ちされ、個人マナー向上のための啓発運動が必要との指摘がありました。

質疑応答では、自動車関係や鉄道関係の企業から具体的な技術課題や研究規模などについて質問があり、今後、共同研究に発展することが期待されます。



連絡先:産学連携本部(本部産学連携グループ)
 電話:内線22857(外線03-5841-2857)
 ホームページ:<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR 検索

DUCR
 Division of University Corporate Relations
 The University of Tokyo

INTERVIEW

大学発教育支援コンソーシアム推進機構
副機構長 三宅 なほみ 教授

今回インタビューに訪れたのは、2008年11月に設置されたばかりの大学発教育支援コンソーシアム推進機構の副機構長、三宅なほみ先生です。

Q. 機構発足の経緯は？

三宅 大学発教育支援コンソーシアムは、小宮山宏総長が教育再生会議で構想されたプロジェクトです。初等・中等教育の改善や広く学ぶ意欲の発展のために、「大学の知」を提供することを目的としています。本学では、すでに知の構造化センターや教養教育開発機構など、「大学の知」が様々な組織から発信されていますが、その目的はこれまでほとんどの場合、大学の中で使われることを目指してきたと思います。「大学の知」がこれだけ蓄積されてきていますので、大学の外に向けてもこれを発信して教育を支援したいという動機から本機構が発足しました。今、国際的に知の共有や協調・協働・協創などのことばが盛んに使われるようになってきています。そういった流れに沿って、本学のリソースを使えるのは有意義なことです。また、様々な大学との連携も構想されていますので、本機構が大学間連携のハブになればよいと思っています。

Q. 機構の役割と活動の内容は？

三宅 機構の役割は、大きく分けて二つあります。本学にたくさんある知のリソースを、学校の教室などで実際に活用できる形で発信すること、大学の知を受け取って教育の質を上げるための実現可能な手段を現場の先生たちと一緒に開発し、実践的に評価することです。そういう実践経験を積み重ねて、学習についての科学、教育支援の基盤を作ります。

活動としては、本学にすでにある多くのコンテンツを実際に活用できる形で提供するためのインターフェイスを開発すること、特定のコンテンツからそれを学校現場での実践につなげ、大学の知が役に立つような実績を作っていくと考えています。これらの活動は、大学の知を利用するユーザーのコミュニティを育てることが中心になります。そこから、「人がうまく学べる仕組み」を科学的に解明して、教育支援の理論ベースを確立していきます。

具体的には、本学にあるコンテンツの整理や、小さな疑問からでも質の高い学習素材にうまくとり着けるようなポータルの開発、webから集めた情報を各自が自分なりにまとめて編集できるツールの開発と実践評価、他人との学び合いを経験して自分でもデザインするワークショップ、学習科学の進み具合を紹介するシンポジウム等を計画しています。国際的には進んでいる分野なので、国際的コミュニティに参加しながら学べる拠点にしたいと思っています。

Q. 総合大学の強みは？

三宅 なんとといっても、コンテンツがたくさんあって、質も高いことでしょう。学内ですでに大学の知を連携させて皆が賢くなるための試みが始まっています。そういった知の協創コミュニティを対外的にも広げれば、参加者が学ぶことを楽しみつづき多様な知を作っていく核として、総合大学の価値はこれから高まっていくはずで、すでにお茶の水女子大学、早稲田大学、京都大学などと連携していますので、互いに強みを活かしながら関係を作りたいと思います。

大学発教育支援コンソーシアム (H20)



総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

Q. 苦勞しそうな点は？

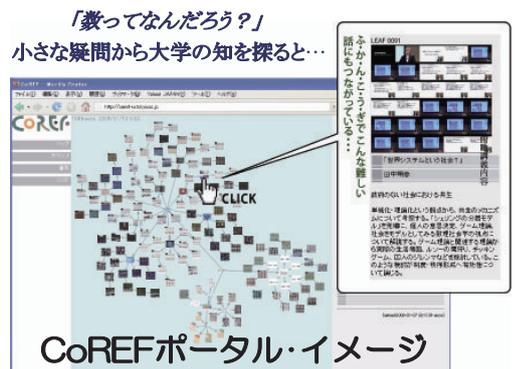
三宅 苦勞というより、チャレンジングなことだと思いますが、研究対象が大きくコンテンツも大量なので、どのように自分たちが扱える形に絞っていくかを考える必要があります。「情報大航海」や「知の爆発」などとも言われていますが、専門家と協力してITをうまく活用することが大切になると思っています。

また、人は本当のところどのように学んでいるのかという学習の実態、どうやったら教え手の意図通りの学びを実現できるかという方法論など、人の学習については多くの部分がまだ科学になっていません。特に人はひとり学んでいるのではなく、他人と関わりを持ちながら理解を深めて行く存在でもあるので、社会的な知の作られ方を科学にすることが大切だと考えています。



Q. 今後の展望・抱負は？

三宅 当面は、今あるコンテンツの使い方を考えながらポータルを整備します。3月20日(金・祝)にはシンポジウムも企画しています。他に、現場の先生方を巻き込んだイベントとして、新しい学びを体験



する1日ワークショップ、学習について科学的に考え直し、大学の知を活かすアイデアを交換し合う2、3日の短期ワークショップ、さらには、2年間くらいかけて東大発のコンテンツを実際授業で使い、その成果を評価する長期参加型プロジェクトなどを計画しています。知の構造化は、今世界中で取り組まれているテーマです。人間の知について、認知科学など50年近くの歴史を持つ科学が少しずつ進歩してきましたが、人が、人の知そのものをどう楽しく育てて行くかについての科学はまだこれからです。このコンソーシアムを、新しい科学を丁寧に育てる苗床にしたいと思っています。

自分の知を他の人、特にまだ知らない人に向かって発信することには、自分自身の知を育てるという見返りがあります。この知のやり取りの互恵性を体験してみたいと思われたら、発信者として、また受信者として、コンソーシアムに参加して下さい。一緒に新しい知の発信源を作っていく仲間を求めています。(インタビューア: 川辺・矢島)

● イベント情報 ●

3月20日(金・祝) 13:00~16:00
駒場 I キャンパス数理科学研究科大講義室にて
大学発教育支援シンポジウム 第二回 開催

● 関連ホームページ ●

<http://coref.u-tokyo.ac.jp> (3月オープン予定)

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ (内線20482)



ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No. 15



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



東大ナビ
はじまる

ケータイでお得なイベント情報をGET!

詳しくは utnav.jp にアクセス。
または mail@utnav.jp に空メール!

東大大学 教育企画室



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
- mail@utnav.jp宛てにメール送信
- 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- <http://utnav.jp>にアクセス
- イベント掲載フォームから送信！
- 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで！
- 内線；27823（重田）
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟401号室

コミュニケーションセンターだより No.56

■入り口展示スペースが明るくなりました。

この季節、日が落ちるのも早く、どうしても外から見ると暗いイメージになってしまうコミュニケーションセンター。そこで展示スペースにスポットライトを設置しました。まだ企画段階ですが、今後それを活かしたディスプレイなどとして参りますので楽しみにしていて下さいね！

お仕事帰り、休憩中など、店内を暖かくしてお待ちしておりますので是非遊びにいらして下さい。



スポットライトで明るく照らされたUTCC

■UTCCスタッフおすすめ商品紹介!!



教養学部前期課程理科Ⅱ類
1年 濱田 大樹

写真：ブロックメモ
473円(税込)

はじめまして。UTCCスタッフの濱田です。The University of Tokyoの頭文字をモチーフに太田岳さんがデザインした“コミュニケーション・マーク”に、より多くの方々が触れ合い、また、東大への理解を深めて頂きたいという想いを込めてスタッフをしています。今回僕のお勧めする商品は「ブロックメモ」です。知性の顔がコンセプトでもあるコミュニケーション・マークを前面にあしらったシンプルなデザインで、ちょっとしたインテリアにもなりまじ、東で切り離してメモ帳として持ち運びも可能です。UTCCでは研究成果商品だけでなく上品かつシンプルなデザインにこだわった商品も多数取り揃えております。皆様のご来店お待ちしております!!

(担当：コミュニケーションセンター 山下)



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

※ 本学入学試験の実施に伴い、2月25日（水）、26日（木）は、お休みとさせていただきます。

ワタシのオシゴト

第36回

Rings around the UT

理学系研究科等事務部人事係

山口 武志さん

ゼロから1を目指しています！



8回撮りました

私は、2007年の8月に、出向先であった独立行政法人大学入試センターから、理学系研究科等事務部人事係に異動してまいりました。現在は主に採用・退職時の手続き、文部科学省や労働基準監督署からの各種調査物の作成、手当の認定手続きなどを行っております。自身の希望により、今回初めて人事係への異動となったのですが、不慣れな私でもなんとかやってくることができたのは、周囲の皆様のご指導やご協力があったからこそだと感謝しております。さて、「ゼロから1へ」というフレーズに覚えがおりでしょうか？ これは2007年理学部オープンキャンパスのテーマですが、当時異動したばかりでまさにゼロ状態だった私にとって非常に印象深いものでした。以来、人事係の

仕事における自分の「1」を模索しつつ最先端の研究を支える者の一人として、日々オープンキャンパスTシャツを愛用しております。今後どの業務に携わっても、ゼロに臆することなくチャレンジしていきたいと思っております。



コソザイル

得意ワザ：何でもすぐ忘れられます
 自分の性格：几帳面でハキハキ…の反対
 次回執筆者のご指名：目黒哲さん
 次回執筆者との関係：平成8年に採用された同期の方
 次回執筆者の紹介：話が面白く楽しい人です



噴水

教育学部附属中等教育学校で浅島誠理事・副学長の特別授業が行われる

1月14日（水）15時40分から17時まで、教育学部附属中等教育学校大教室において、浅島誠理事・副学長の特別授業「動物の形づくりと器官形成」が行われた。生徒・保護者・教職員、約100名が熱心に聴講した。はじめに、浅島先生の生まれ育った新潟県佐渡での体験が話され、「私の生物学は朱鷺からはじまった」と生物学へ進むきっかけが伝えられた。「自然と生き物に学ぶことから理科の教材ははじまる」との認識をもっておられ、現在でも、学生とともに、年に二度、「イモリ」を採集に行かれるそうである。学生には、「わからないことは、調べていく」ことを教えられるそうである。そのなかで、自分で感動を覚えることが大切であると語られた。イモリの採集・研究から学んだこととして、「イモリの癌は、冬眠している間に治癒すること」や「イモリは厳冬の川の中にいる時、イモリ玉（約500～1500匹）という集合体を作って動き回っていること」などを挙げられた。こうして、生物の美しさ・面白さ・不思議さを知ったと、そのときの感動を聴講者へ伝えてくださった。

その後、先生のご研究の話になり、ベルリン自由大学分子生物学研究所・横浜市立大学での研究の様子や、お金がない中でも苦勞して研究を続けられたことを話して下さった。アクチビン（分化誘導物質）を15年かけて発見されたことや、「未分化細胞にアクチビンをかけると、筋肉ができる」という研究によって、筋肉のできるメカニズムがわかり、それは、試験管の中で行ったのであるということ述べられた。スクリーンには、さまざまな生物の器官の発生の様子も適映し出され、生徒たちも興味深く見ていた。先生は、ご専門の発生生物学を研究することによって、「自分で動くものをつくる科学というものは美しいと思えるようになった」と述べられた。講義の最後に中学生・高校生に望むこととして、「passionをもって取り組み」「物事には順序がある。確実な技術の習得」「予測に反する結果を見逃すな」「オリジナルの研究をし、結果が出たら論文を。ノートを常に書け」「流行に惑わされずに、自分の学問を貫け」の5点を挙げられた。

先生の今後のますますのご活躍を祈念致します。



浅島誠理事・副学長の講義の様子

平成21年度 学内広報発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日	配布
1385	4月 1日(水)	4月 23日(木)	4月 30日(木)
1386	4月 28日(火)	5月 25日(月)	5月 29日(金)
1387	5月 28日(木)	6月 19日(金)	6月 25日(木)
1388	7月 1日(水)	7月 27日(月)	7月 31日(金)
1389	7月 28日(火)	8月 25日(火)	8月 31日(月)
1390	8月 28日(金)	9月 17日(木)	9月 28日(月)
1391	10月 1日(木)	10月 23日(金)	10月 29日(木)
1392	10月 29日(木)	11月 20日(金)	11月 27日(金)
1393	学生生活実態調査号		
1394	11月 25日(水)	12月 17日(木)	12月 24日(木)
1395	1月 6日(水)	1月 25日(月)	1月 29日(金)
1396	1月 29日(金)	2月 19日(金)	2月 25日(木)
1397	セクシュアル・ハラスメント調査特集号		
1398	2月 25日(木)	3月 19日(金)	3月 26日(金)

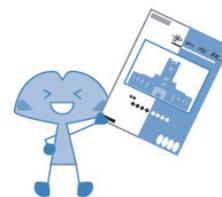
学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
TEL:03-3811-3393 内線22031 E-mail:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

大学院教育学研究科・教育学部

公開シンポジウム「教育学部における教育・研究の課題—東京大学大学院教育学研究科・教育学部の外部評価を踏まえて—」のご案内

大学院教育学研究科・教育学部では、2008年度に2回目の外部評価を実施しました。その結果を踏まえて、本研究科・学部における教育・研究活動の在り方と社会的役割について考えるためのシンポジウムを企画しました。年度末でお忙しいこととは存じますが、奮ってご参加ください。

【日時】 3月18日(水) 14:00～17:00

【会場】 赤門総合研究棟 200番教室(赤門入って右側。教育学部の前)

【主催】 東京大学大学院教育学研究科・教育学部

【内容】

◇第1部(14:00～14:40)

「大学院教育学研究科・教育学部の現状と課題」

金子元久(大学院教育学研究科長・教育学部長)

・教育面：市川伸一(大学院教育学研究科教授)

・研究面：山本義春(同上)

◇第2部(14:40～16:40)

「評価と提言」

【シンポジスト】

潮木守一(名古屋大学名誉教授)他 外部評価委員

◇第3部(16:40～17:00)

「総合討議」

【参加費】 無料

【参加申し込み】 特に必要ありません。

当日直接お越し下さい。

【問い合わせ先】

庶務チーム 電話 03-5841-3903 FAX 03-5841-3914

e-mail: edushomu@p.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

お知らせ

退職教員の最終講義

学内広報では、今年度末をもって本学を退職される方々の最終講義のお知らせを掲載します。

大学院医学系研究科・医学部

安藤 譲二 教授

(システム生理学)

日時：3月9日(月) 15:00～16:30

会場：医学部2号館本館大講堂

演題：「シェアストレスと血管内皮細胞」

玉置 邦彦 教授

(皮膚科学)

日時：3月12日(木) 15:30～17:00

会場：医学部臨床講堂

演題：「大学における皮膚科学」

小俣 政男 教授

(消化器内科学)

日時：3月13日(金) 16:00～17:30

会場：医学部2号館本館大講堂

演題：「若き俊英との東大医学部十七年」

廣川 信隆 教授

(細胞生物学・解剖学)

日時：3月16日(月) 15:30～17:00

会場：医学部2号館本館大講堂

演題：「生命を観る：私の生命科学研究の過去、現在そして未来」

高本 眞一 教授

(心臓外科学・呼吸器外科学)

日時：3月27日(金) 15:00～16:30

会場：医学部臨床講堂

演題：「医の原点に基いた教育・臨床・研究」

大学院工学系研究科・工学部

毛利 尚武 教授

(精密機械工学専攻・精密情報システム大講座)

日時：3月6日(金) 15:00～16:00

会場：工学部2号館 213講堂

演題：「ものづくり散歩道」

松島 克守 教授

(総合研究機構プロジェクト部門)

日時：3月18日(水) 15:00～17:00

会場：工学部2号館 213教室

演題：「俯瞰工学の始めと展開—技術経営学、地域ク
ラスタ—、知の構造化」

大学院理学系研究科・理学部

松浦 充宏 教授

(地球惑星科学専攻・固体地球科学講座)

日時：3月9日(月) 16:00～17:30

会場：理学部新1号館小柴ホール

演題：「学問の世界で出会った人々」

佐藤 勝彦 教授

(物理学専攻、宇宙物理学講座)

日時：3月6日(金) 16:30～18:00

会場：理学部新1号館小柴ホール

演題：「超新星からインフレーション宇宙へ」

大学院農学生命科学研究科・農学部

西澤 直子 教授

(農学国際専攻・新機能植物開発学研究室)

日時：3月13日(金) 15:00～17:00

会場：弥生講堂一条ホール

演題：「『かたち』に魅せられてその機能を探る」

大学院総合文化研究科・教養学部

岡 秀夫 教授

(言語情報科学専攻、英語部会)

日時：3月12日(木) 16:00～17:30

会場：駒場18号館ホール

演題：「英語教育と私」

木畑 洋一 教授

(アメリカ太平洋地域研究センター、前期課程英語部会)

日時：3月18日(水) 15:00～

会場：駒場18号館ホール

演題：「世界史の中のイギリス帝国」

大学院薬学系研究科・薬学部

海老塚 豊 教授

(分子薬学専攻)

日時：3月6日(金) 14:00～16:00

会場：薬学系総合研究棟2階 講堂

演題：「天然物生合成に魅せられて40年」

大学院情報理工学系研究科

杉原 厚吉 教授

(数理情報学専攻)

日時：3月3日(火) 16:00～17:45

会場：工学部11号館1階 講堂

演題：「手探りの数理工学

—超ロバスト幾何計算への道—」

館 暉 教授

(システム情報学専攻)

日時：3月4日(水) 15:00～17:00

会場：工学部11号館1階 講堂

演題：「時空を超える技術『トレイグジスタンス』」

地震研究所

島崎 邦彦 教授

(地球流動破壊部門)

日時：3月26日(木) 16:00～17:00

会場：地震研究所2号館第一会議室

演題：「地震学概説」

佃 為成 准教授

(地震地殻変動観測センター)

日時：3月26日(木) 17:00～18:00

会場：地震研究所2号館第一会議室

演題：「未来へ繋ぐ ～たかが水温・されど水温」

生産技術研究所

渡邊 勝彦 教授

(基礎系部門)

日時：3月12日(木) 13:30～15:00

会場：駒場IIキャンパス総合研究実験棟(An棟)2階
コンベンションホール

演題：「一点を見つめて」

藤田 隆史 教授

(機械・生体系部門)

日時：3月12日(木) 15:30～17:00

会場：駒場IIキャンパス総合研究実験棟(An棟)2階
コンベンションホール

演題：「免震構造・アクティブ振動制御・スマート構造
のための30年をふりかえって」

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

**「教養学部報」第518(2月4日)号の発行
—教員による、学生のための学内新聞—**

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学
際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協
書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。
バックナンバーもあります。

第518号の内容は以下のとおりとなっていますので、
ぜひご覧ください。

川中子義勝：「矢内原忠雄と教養学部」展
高塚 和夫：駒場の1ピースが見た駒場祭

長谷川壽一：初年次活動センター
 スポーツ・身体運動部会：「力と動きのコラボレーション」
 第16回身体運動科学公開シンポジウムを
 終えて

加藤 恒昭：ホームカミングデイ開催される

村田 昌之：2008年ノーベル化学賞の紹介——「見る」
 ことで終わるのでなく、「見る」ことから
 はじめる——

橋川 健竜：オーストラリアの個性にせまる CPAS シ
 ンポジウム「アメリカ太平洋とイギリス帝
 国」

渡邊雄一郎：「食」を考える—— KIRIN・東京大学パー
 トナーシッププログラム

石橋 純：レクチャー・コンサート「南米のマンドリ
 ン音楽」報告

和田 毅：〈時に沿って〉話す技術

〈駒場をあとに・おくる言葉〉

白井隆一郎：〈駒場をあとに〉契約を終えて

鍛冶 哲郎：白井隆一郎先生を送る～シュトゥンプ先生
 への謝辞を添えて～

繁榎 算男：〈駒場をあとに〉データから学ぶ

丹野 義彦：繁榎算男先生を送る

木畑 洋一：〈駒場をあとに〉変わる駒場、変わらぬ駒
 場

ジョン・ボチャリリ：木畑洋一先生をおくる

桂 利行：〈駒場をあとに〉駒場キャンパスの発展と
 ともに

宮岡 洋一：桂さんの新たな旅立ちを祝う

菊地 文雄：〈駒場をあとに〉駒場地区での36年

齊藤 宣一：菊地文雄先生をおくる言葉

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

レポート・論文の執筆や、ゼミ発表の準備の際、どの
 ようにして必要な文献を入手していますか？ 文献探し
 で困ったことはありませんか？

情報基盤センター図書館電子化部門では、“情報探索
 ガイダンス”各種コースを実施しています。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなた
 でも参加できます。ぜひご参加ください。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
 (各回先着12名。予約不要。直接ご来場ください。)

●日程・コース概要：

■ 3/3 (火) 11:00～12:00 日本の論文を探すには？

■ 3/13 (金) 15:00～16:00 (3/3と同内容)

日本国内の雑誌論文、どうやって検索していますか？
 このコースでは、代表的なデータベース、CiNii (サイ
 ニイ) の使い方を中心に解説します。

【注意！】FELIXは3月末でサービス終了し、利用でき
 なくなります。今後は、国内雑誌論文の検索にはCiNii
 をご利用いただくこととなります。ぜひこのコースで
 CiNiiの使い方をマスターしてください。

■ 3/5 (木) 15:00～16:00 自宅から検索するには？

自宅からも文献検索したいと思いませんか？このコ
 ースでは、学内・学外を問わず利用できる無料公開のデー
 タベース・電子ジャーナルや、ECCSアカウントによる
 認証で学外から利用可能になるSSL-VPN Gateway サー
 ビスなどを紹介します。

【参考】ECCSアカウントの取得については下記サイト
 をご参照ください。

(<http://www.ecc.u-tokyo.ac.jp/doc/announce/newuser.html>)

■ 3/6 (金) 15:00～16:00 電子ジャーナルを利用するには？

電子ジャーナルを使えば、欲しい論文の本文がWeb
 で簡単に見られます。このコースでは、代表的な学術出
 版社の電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方
 法を解説します。また、「UT Article Link」(東京大学
 学術論文リンク)を使ってデータベース検索結果から電
 子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

■ 3/11 (水) 11:00～12:00 文献検索早わかりコース

図書や電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各
 種の文献検索方法を、まとめてコンパクトに解説します。

■ 3/12 (木) 15:00～16:30

～Webで文献の「検索」から「整理」まで～
 Web of Science + EndNote Web コース

Web of Scienceは、全分野の主要学術雑誌に掲載さ
 れた論文のデータベースです。通常のキーワード検索に
 加え、引用文献を手がかりとした検索も可能です。後半
 は、検索結果をWeb上に保存・整理し論文執筆に利用
 できる文献管理ツールEndNote Webの利用方法を説明
 します。

●参加費：無料

●出張講習会、随時受付中です！

授業やゼミなどに、出張します。ご希望の日時、会場、
 内容、人数、連絡先を、メールで下記までご連絡くださ
 い。(無料)

ご希望の内容・レベルに合わせて、講習します。出張
 講習会については、下記サイトをご参照ください。

(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

本部学生支援グループ

第55回東京地区国公立大学連合文化会美術展 (国公立展)のご案内

都内国立大学11校の美術系サークルの作品が一同に会する展覧会「東京地区国公立大学文化会美術展 都内国立大学11校美術部合同展」(国公立展)が今年は東京海洋大学が当番校となり、下記の日程にて開催されます。

この美術展は、実施までおよそ1年をかけ、学生が主体となって企画、準備を行うもので、テーマ(今年は「水」)に基づく各大学の共同作品等、多種多様な作品が出展され、学生間の交流を促進するとともに、活動意欲を刺激する場となっています。

本学からは毎年、美術サークル(本学届出学生団体)が参加しています。是非、この機会に学生達の成果をご覧ください。

日時：3月10日(火)～3月15日(日)
10:00～18:00(初日は14:00～18:00、
最終日は10:00～17:00まで)

場所：目黒区美術館区民ギャラリー

入展料：無料



ポスター絵作者：小泉紀彰(東京大学)

参加大学：
東京海洋大学
お茶の水女子大学
首都大学東京
電気通信大学
東京大学
東京医科歯科大学
東京外国語大学
東京学芸大学
東京工業大学
東京農工大学
一橋大学



H P (PC) : www.kaiyodai.ac.jp/kokkou55/

H P (携帯) : www.kaiyodai.ac.jp/kokkou55/m.html

【本件に関する問合せ先】

本部学生支援グループ学生生活チーム 山田・宮内

TEL : 03-5841-1205・2514 (内線 21205・22514)

お知らせ

分子細胞生物学研究所

技術発表会開催のお知らせ

分子細胞生物学研究所では、以下の予定で今年度の技術発表会を開催することになりました。

日時 3月12日(木) 13:00～15:30

会場 分子細胞生物学研究所本館1階会議室

参加費 無料

問い合わせ先 tasakura@iam.u-tokyo.ac.jp

プログラム

「結晶構造解析用蛋白質の大量精製」

細胞形成 横田 直子

「膜蛋白質の発現と精製」

生体超高分子 杖田 淳子

「ショウジョウバエを用いた匂い連合学習実験の効率化の検討」

形態形成 前山 有子

「サリドマイドの作用多様性と構造展開」

生体有機化学 谷内出 友美

特別講演も予定しています。

お知らせ

情報基盤センター

FELIX データベース サービス終了のお知らせ

雑誌記事索引等国内外の主要学術雑誌目次情報を提供してきた情報基盤センター図書館電子化部門による「FELIX」データベースは、機器類の老朽化とインターネット上のデータベースが充実してきたことにより本年3月末をもってサービスを終了することとなりました。これまで多くのご利用ありがとうございました。

FELIX に代わる検索手段については

http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/utonly/felix_utas.pdf

をご覧ください。

●問い合わせ：図書館情報係

03-5841-2614 (内線：22614)

syskan@lib.u-tokyo.ac.jp

訃報

小野英祐名誉教授

小野英祐先生は2008年12月20日午前0時に永眠されました。享年73歳でした。年賀状を書いた後、入浴中に脳出血に襲われた由で、まことに突然のご逝去でした。



先生のご経歴を簡単にご紹介しますと、1935年1月28日、長野県にお生まれになり、1957年3月に東京大学経済学部経済学科ご卒業、1962年3月に同大学院社会科学部研究科理論経済学・経済史専門課程を修了されました。その後、立正大学経済学部で専任講師から教授までお務めになり、1974年4月より東京大学経済学部助教授として着任、1978年10月より同教授に昇進され、95年をもってご退官されました。本学での教育、研究は21年にわたります。退官後は、国士舘大学政経学部教授として2005年3月まで務められご退職、同大学でもう1年間、非常勤講師をされた後は、悠々自適の生活を楽しんでおられたと伺っております。

先生のご専門は理論経済学となっておりますが、アメリカを主として金融史のご研究に長く携わってこられました。代表的な著作としては、「連邦準備制度の成立過程」という連作、「両大戦間期におけるアメリカの短期金融機関」、「資金と信用」、共著として『現代金融の理論と構造』があります。そのほか「アメリカにおける1873年恐慌」、同「1884年恐慌」など意欲的な論文を發表されていましたが、これも後進の研究者にとって参照すべき業績であります。先生の学問は、たんに論理の整合性を尊重するのみではなく、歴史的事実の裏付けを探究する、逆に史実の究明は方法論に基礎付けられねばならないとの姿勢を一貫して堅持されてきました。また忘れてならないのは、ナチスの研究に必読文献となっている『ビヒモス—ナチズムの構造と実態』を共訳されたことです。先生の鋭い歴史感覚を示すお仕事です。学部のゼミ生や院生に対しては、時に厳しく、時には情のこもった指導ぶりでも知られています。多くの教え子から慕われる、旧きよき時代の教育者でもありました。

ここに先生の長年にわたるご尽力に感謝するとともに、謹んでご冥福を心よりお祈り申し上げます次第です。
(大学院経済学研究科)

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

	氏名	異動内容	旧（現）職等
(退職)			
21.1.31	入江 寛	辞職（山梨大学クリーンエネルギー研究センター教授）	大学院工学系研究科准教授
(採用)			
21.1.16	深柄 和彦	医学部准教授	防衛医科大学校防衛医学研究センター准教授
21.2.1	三浦 竜一	ライフサイエンス研究倫理支援室教授	環境安全本部特任准教授
21.2.1	伊藤 大知	大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター准教授	東京工業大学資源化学研究所助教
21.2.1	杉田 和幸	分子細胞生物学研究所准教授	
(昇任)			
21.2.1	小口 高	空間情報科学研究センター教授	空間情報科学研究センター准教授
21.2.1	小玉 重夫	大学院教育学研究科教授	大学院教育学研究科准教授
21.2.1	HWANG HAROLD YOONSUN G	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
21.2.1	酒井 啓司	生産技術研究所教授	生産技術研究所准教授
(配置換)			
21.2.1	市川 昌和	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター教授
21.2.1	古澤 明	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター教授	大学院工学系研究科教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。



「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提出要領

作成例

本部広報グループ

「キャンパスツアー」スタート!

本学学生がツアーガイドとなって、赤門や大講堂(安田講堂)、三四郎池、総合図書館など、本郷キャンパス内の名所旧跡を案内する「キャンパスツアー」が今年も始まった。キャンパスツアーは昨年度から実施されており、「ジュニアTA制度」に基づき応募した学生が、東京大学の歴史や学生生活のエピソードを交えながら、約2時間にわたり案内する。

今年度のスタートとなった5月14日(土)には、午前、午後合わせて43人が参加し、ツアーガイドの説明に熱心に耳を傾けていた。



広報センター前で説明するガイドとそれを聞く参加者

ツアーには、高校生以上であれば誰でも無料で参加することができる。今後のツアーは、夏休みや年末年始、入試、学期末試験期間を除く授業期間の火曜日(10:00~12:00)と土曜日(10:00~12:00、13:30~15:30)に行われる予定である。



正門から大講堂に続く銀杏並木

記事の冒頭に**部局名**を記載

簡潔で分かりやすい**タイトル**を記載

- ・過去の報告記事(ニュース)では「**である調**」を用いる
- ・今後のお知らせ(インフォメーション)では「**ですます調**」を用いる

日付には括弧書きで**曜日**をつける

- ・写真を掲載する場合は、25文字以内で**キャプション**(写真の説明文)をつける
- ・原稿とは別に、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを別途送付する(プリントの写真は学内便で送付)

句読点は「、」「。」を用いる

時間は**24時間表記**とする

- ・記事は一行25文字の書式で作成する。
- ・文字数は800字を目安とするが、内容によって増減は可とする。
- ・人物名は**フルネーム**で表記すること。

提出上の注意

1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとして送付すること。

(学内広報担当者の個人アドレスではなく、必ず下記のアドレスに送付してください。)

2. 締切日

発行スケジュールは本誌16ページに掲載しています。

4月以降はHPで確認すること。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

トップページ> 広報・情報公開> 学内広報

問い合わせ先・提出先

本部広報グループ広報企画チーム

TEL: 03-3811-3393(内線 22031)

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

※原稿を受け取った後、学内広報担当者から、必ず**受領メール**をお送りしています(概ね1週間以内)。返信メールが届かない場合は、何らかのトラブルで原稿を受け取れていない可能性がありますので、その際は**お問合せ願います**。

Contents

特集

- 02 特集 ご存知ですか？本郷キャンパスのレア知識

NEWS

一般ニュース

- 04 本部人事給与グループ
今年度の定年退職教員は 61 名
- 05 環境安全本部
「東京大学教職員・学生のための救命講習」開催される
- 05 地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)
アフリカ水循環シンポジウム開催
- 06 地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)
「データ統合・解析システム (DIAS)」平成 20 年度最終報告会開催

部局ニュース

- 07 大学院法学政治学研究科・法学部
バーベキュー・パーティを開催
- 08 生産技術研究所
「位置エネルギーを活用した世界初の省エネ型都市交通システムの実験線」を附属千葉実験所に敷設
- 08 大学院教育学研究科・教育学部
堀尾輝久名誉教授にトゥールーズ第Ⅱ大学 (フランス) より名誉博士号が授与される
- 09 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で「新年会」開催される
- 10 先端科学技術研究センター
先端研に新名所「PAUSE (パウゼ)」誕生
- 11 大学院総合文化研究科・教養学部
駒場Ⅰキャンパスで「研究科長と留学生との懇談会」開催される

コラム

- 12 Crossroad 産学連携本部だより vol.39
- 13 発掘！総長室総括委員会 第11回
- 14 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No.15
- 14 コミュニケーションセンターだより No.56
- 15 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第36回
- 15 噴水 教育学部附属中等教育学校で浅島誠理事・副学長の特別授業が行われる
- 16 平成 21 年度学内広報発行スケジュール

◆ 表紙写真 ◆

本郷キャンパス・レア知識マップ
(2 ページに関連記事)

編集後記

本部棟 12 階大会議室に赴き、歴代総長の肖像写真を見てきました。比べてみると、佐々木前総長と蓮實元総長の写真はデジタル撮影、吉川元総長以前の写真はフィルム撮影、大正時代以前の写真は乾板 (薬品を塗ったガラス板) による撮影のようでした。驚いたのは歴代総長の目線です。明治・大正期あたりの昔の写真はすべてカメラから目線を外しており、ある時期の写真からすべてカメラ目線になっているのです。おそらく、初期の肖像写真は肖像画と同じ感覚で構図を決めていたので目線を外していたのでしょう。ちなみに、歴代全総長のうち、横顔で写っているは山川健次郎元総長だけ。白虎隊経験者の山川先生らしい個性だなという気がしました。当たり前のように残されていく東大の事物に見え隠れする時代性……残るもの、あるいは残していくべきものの中に大切な何かがあると感じます。今号の特集でも、そのような東大の事物をいくつか紹介してみました。お楽しみいただければ幸いです。(し)

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 17 大学院教育学研究科・教育学部
公開シンポジウム「教育学部における教育・研究の課題—東京大学大学院教育学研究科・教育学部の外部評価を踏まえて—」ご案内

お知らせ

- 17 退職教員の最終講義
- 18 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第 518 (2 月 4 日) 号の発行
—教員による、学生のための学内新聞—
- 19 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ
- 20 本部学生支援グループ
第 55 回東京地区国公立大学連合文化会美術展 (国立展) のご案内
- 20 分子細胞生物学研究所
技術発表会開催のお知らせ
- 20 情報基盤センター
FELIX データベース サービス終了のお知らせ

訃報

- 21 小野英祐名誉教授

事務連絡

- 21 人事異動 (教員)
- 22 「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提出要領

淡青評論

- 24 坂本先生？坂本さんと呼んでおくれ。



七徳堂鬼瓦

坂本先生？坂本さんと呼んでおくれ。

お正月にNHKの番組を見ているとノーベル物理学賞を受賞された益川さんが、研究者同士、大学院生も含め、平等に議論をする雰囲気があった当時の名古屋の物理教室にあった旨のことをおっしゃられていた。教員も大学院生もお互い「さん付け」で呼び合う風習があったようだ。その風習は私の出身である京大の物理第二教室にも伝わっていた。私が大学院に入ったばかりの頃、学生実験の時に指導を受けた研究室の助手の方を「先生付け」で

呼んだところ、すぐに上級生に呼び出され、「なぜ先生付けで呼んだ？おまえは大学院に入っているが研究者としての自覚はないのか」と怒られた。大学院に入ったらすでに研究者への道へ踏み出したのだから教員も対等にさん付けで呼べということであった。

当時ほかにもいろいろと大学院生を一人前に扱う制度があった。研究計画委員会という教室運営の執行機関にも大学院生が被選挙権を持っており複数名が選出されていた。否応なしに研究者の自覚が植え付けられていくシステムであったように思う。当時修士課程で出て行くものは少なく、おおかた博士後期課程に進学していた。研究者養成の傾向が強かったのでそういうシステムも有効に機能していた。2001年まで再度私も京大に籍を置いたが、システムは健在であった。

東大に移ってからも大学院生の指導に当たっているが雰囲気はかなり違っている。特に最近では博士後期課程に進学する割合が低い。大学院重点化によって枠は広がり、結果として修士課程は学部の延長のようになってしまったとか、ポスドクばかり増え、安定な研究職が減っており、将来に確信が持てないとか、いろいろ原因は取りざたされているが、結局は研究職がおもしろそうだ、挑戦する価値があると確信させることができているという意味で指導が悪いのかもしれない。これはなかなか大変な課題で、最近では京大でも同様の傾向が見られるという。全員に博士後期課程に進んでもらう必要はないが、多くが修士で卒業する環境にあっても、研究者を目指す大学院生が動揺せず確信をもって進学できる仕組みをどう作っていくか考えている。とりあえず大学院生に「坂本さん」と呼ばせるようにしているが、これだけではだめなようである。

坂本宏（素粒子物理国際研究センター）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

【訂正】

学内広報において、一部誤りがありましたので訂正いたします。関係部局および関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

No.1382（2009.1.26）

46 ページ中段：表紙写真解説の執筆者署名

（誤）農学生命科学研究科附属農場 教授 眞鍋昇

（正）農学生命科学研究科附属農場 教授 眞鍋昇

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1383 2009年2月16日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL：03-3811-3393

e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp